



優 秀 賞

設計部門



青葉山公園 新たな街づくりの起点となる公園づくり

株式会社グラク

井野貴文・北川明介・西山秀俊・岸井悠子・植原睦美

Fd Landscape

福岡孝則

株式会社ティーハウス建築設計事務所

槻橋修・荒木麻利佳・岩田悠介（元所員）

株式会社文化財保存計画協会

矢野和之・木下寿之・村合永光

はじめに

青葉山公園は、国史跡指定地区、国際センター地区、追廻地区の3つの地区で構成された総合公園である。本設計対象地は、追廻地区内に位置する約2.6haの「公園センター地区」である。

2017年に「青葉山公園（仮称）公園センター基本計画」の策定を機に公園センター地区の共用開始に向けての第一歩が踏み出された。

本作品は、「公園センター基本計画」を具体化することを目的とし、建築事務所と協働した基本・実施設計成果である。

公園整備テーマ

基本計画を前提とした市からの要求事項は、①歴史・文化の発信拠点としての場づくり、②市民活動の拠点としての場づくり、③自然環境に親しめる場づくりの3点であった。これらに応え、実現化するため、「新たな街づくりの起点となる公園」を公園整備テーマに掲げた。

作品概要

作品名——青葉山公園 新たな街づくりの起点となる公園づくり
 所在地——宮城県仙台市青葉区川内地区
 発注——仙台市
 設計——株式会社グラク、Fd Landscape、株式会社ティーハウス建築設計事務所、株式会社文化財保存計画協会
 施工者——株式会社高工、星造園土木株式会社
 監理——仙台市
 設計期間——2017年11月～2022年9月
 施工期間——2021年1月～2023年3月
 規模——約2.6ha
 主要施設——屋敷林（公園センター北側の庭）、もりの庭園（公園センター南側の庭）、集まり広場、もりの参道、もりの市民広場、中央広場、桜の小径（広瀬川テラス、サクラテラス含む）

作品評

本作品は、青葉山一帯に対して都市計画決定された、約50haの総合公園の一部をなす公園センター地区の基本・実施設計である。対象地は、国史跡指定地区に隣接し、「山と街」「山と川」をつなぐ位置にあるという立地特性から、設計者には「歴史・文化の発信拠点」、「市民活動の拠点」、「自然環境に親しめる場」としての公園づくりが求められた。これらの要求に対し設計者は、城と街をつなぐ「もりの参道」、広瀬川に開けた「桜の小径」2つの動線を設けて公園への誘導を確保し、併せて公園の魅力を高める景観軸を創出している。また、自然に親しめる場づくりへの要求に対しては、青葉山の御裏林をモデルとした「もりの庭園」を整備して自然を体感できる場を確保している。作品では、この庭園に小さな流れを設けて谷戸の自然の再生を図っていることや、桜の小径沿いへの歩行の快適性と景観の調和性を高める草花の植栽、藩制時代の石材の活用など、デザイン・素材に細かな配慮がなされており、全体として新しい街の顔にふさわしい公園づくりに成功していると評価され、優秀賞となった。



①新たな街づくりの起点となる公園センター地区の全景 ②街と城を繋ぐ軸を強調した参道と緑 ③街地形成のコンテクストを取込んだ庭 ④青葉山や園内の緑を映し込む水盤 ⑤御裏林をモデルにした新たな森 ⑥大橋方向を意識した舗装パターン

風景デザインの取り組み

1. 市街地と仙台城跡を結ぶ空間軸をつくる

市街地と登城路を繋ぐ軸線上に公園敷地を取込み、広場とテラス、それを繋ぐ参道を配置し、参道に沿って緑の帯をつくり、街と城を繋ぐ軸を強調した。

2. 市街地形成のコンテクストを鑑賞の庭に取込む

公園センターの北面（玄関口）に、広瀬川によって形成された街の段丘構造を地形デザインに取込み、武家屋敷で植えられていた果樹を意識した植栽を施した。

3. 人と森を繋ぐ水盤

仙台城の堀から着想した水盤を公園センターに面して配置した。水盤は青葉山と園内の緑を映し込む景観装置になり、風と

光を取り込む環境装置にもなる。

4. 御裏林（青葉山）をモデルにした新たな森づくり

自然と触れ合う森づくりを目指し、小さな沢が入り込んだ谷戸を地形デザインに取込み、この地形に合わせて御裏林の自然植生である「モミ・イヌブナ林」等を配置した。雨水を暗渠管により沢筋に吐水し、降雨とシンクロして立ち現れる流れや池の水景をつくった。

5. 広瀬川を身近に感じる川辺づくり

広瀬川に張り出した2つのテラスを配置し、川沿いに延びる約180mの園路によりテラスを結んだ。大橋方向に延びる軸線を意識して舗装パターンを構成し、川と橋の風景を公園に取込み、公園と川を結ぶ景をつくった。

設計部門